金井先生に見た教授像

比留間　亮平

私が宗教学宗教史学科の修士課程に入学したのは，わずか２年前の2002年４月のことだった。その時に指導教官として金井先生の名を告げられ，また同時に私が，その２年後に退官される予定となっていた先生の最後の弟子であるということも教えられた。しかし最後の弟子と言えば聞こえは良いが，要は私が門下生のうちで，先生から教えを受けた期間が最も短い人間だということだ。だから今回の原稿の話を聞かされた時，そんな私が諸先輩に交じって一体何を書いたらよいのか正直戸惑ったが，今回はそんな私でも触れることができた先生のお人柄について簡単に振り返ってみたいと思う。

金井先生と言えば何よりもまず，あの人をほっとさせるような大らかな人柄が特徴的であるように思う。実際，先生が誰かを厳しい口調で叱責されたなどという話は聞いたことがないし，先生のそんな姿は多くの人にとって想像できないだろう。私も先生のそんな人柄に感銘を受けると共に，先生とは対照的な自分の小心さを思い，しばしば恥じ入ったものだったが，例えばこんなことがあった。修士一年の時，怠慢な私は論文の提出資格を得るのに最低限必要な16単位ちょうどしか履修していなかったのだが，二年の春にその前年度の成績表を確認したところ，なんと履修したはずの金井ゼミが登録されておらず，12単位しか取得できていなかった。履修の確認を忘れていたのだ。これでは論文を出す前から負けになってしまう，と私は慌てふためいて先生の研究室へ押し掛けて事情を説明し，厚かましくも単位を認定してもらえるようお願いした。しかしそんな迷惑で身勝手な学生に対し，先生は一言，「それはいけないね」と例の穏やかな口調で仰り，嫌な顔一つせずにその場で単位認定の手続きを取って下さった。

駒場での学生生活などの経験から，一度決まった単位の認可を変更するのは大ごとだとばかり思っていた私は，先生のご厚情に感謝すると共に，大学院に進学してまで単位の取得などに汲々としている自分が情けなく思えたものだった。

しかし，そんな先生だからこそ，講義の間にはっきりとした口調で語られた一言が，なおさら強く印象に残るのだと思う。今年の，すなわち先生にとって最後となるゼミで私が感じたのはそのことだった。今年度のゼミでも，ここしばらく先生にとって主たる関心の対象となっていらっしゃった「ニューコンパラティヴィズム」をめぐる幾つかの文献を講読していたが，確かそれはいわゆる「ポストコロニアル」という文脈での人類学の動向，先生に言わせれば「自信を喪失している」というそれに話が及んだ時のことだったと記憶している。その中で，その「現地人」を研究する西洋人という話に対比させて，我々日本人が西洋を研究する際その日本人としての視点を脱却することが可能なのか，という質問を私は行ったのだが，それに対し先生は逆に「君はどう思いますか」と問いかけられた。私はさしたる考えもなく，やはりそれは難しいのではないかと答えたが，先生はそれに対し例の口調で，しかしはっきりと，「そう言ってしまったらそれは学問ではなくなる」という趣旨のことを述べられた。

先生の口からはっきりと「学問」という言葉を聞いたのはこれが初めてだったが，この時，なぜ先生がこれらの文献についてあれほどもどかしさを感じておられたのか，またその講義の中でなぜあれほど一般性や面白さという言葉を口にされたのかが，ようやくおぼろげに分かったような気がした。そう思うと，わずか二年間しか先生について学ぶことができなかったことはなおさら残念ではあるが，こればかりは自分の生まれの遅さを嘆くより他ないであろう。